

新見地域におけるわらべうた調査 第1報

吉村 淳子*

新見公立短期大学幼児教育学科

(2015年11月18日受理)

近年、子どもたちがわらべうたで遊ぶ姿はほとんど見られなくなった。幼児教育現場で設定された活動としてわらべうたが歌われることはあるものの、それ以外で、自ら子どもたちがわらべうたで遊ぶ姿をほとんど見なくなった。出版されている本に収録されている画一化されたわらべうたは、まだ歌われる可能性があるが、地域に古くから伝えられているものについては、ほとんど歌われることはなくなっているように思われる。この地域に根づいたわらべうたは、それぞれの時代背景や歴史文化などが反映されており、地域の民俗文化ともいえる貴重なものである。しかし、現在このような地域に根づいたわらべうたを知っている人は年々少なくなっており、今や消滅しようとしているといえる。そこで、地域のわらべうたを子ども達に伝えていくためには、現在残っているわらべうたを収録することを課題として考え、調査を行うこととした。現段階では、21曲のわらべうたが収録できた。

(キーワード) 新見地域, わらべうた, 伝承

はじめに

近年、子どもたちが昔ながらの遊びやわらべうたで遊ぶ姿を見ることがなくなってきた。保育園や幼稚園などで活動の一部として、わらべうたを取り上げる場面はあるものの、子どもたちの遊びの中で、わらべうたが歌い遊ばれることは非常に少なくなってきたように思われる。

幼児教育の場で意図的にわらべうたを歌う活動の場合には、地域に根づいたわらべうたではなく、画一化、一般化されたものになってしまう傾向が強い。その理由として、幼児教育現場で取り上げられるわらべうたは、楽譜や遊び方が書かれている出版物を使用するためと考えられる。

また、歌い継がれなくなった理由としては、現在の社会的環境の影響が大きいと考えられる。地域の中で大人も子供も含めて、異なる年齢層の人と交わることがほとんどないため、地域に残っているさまざまな行事やわらべうたが伝承される機会がなくなっていることもあるだろう。また、さらに地域に残っているわらべうたの歌詞は、戦争に関するものや軍国主義に触れるような内容のものもあり、その表現の是非が問われることもある。

このように問題も含んではいるが、地域に伝承されているわらべうたは、是非は別にして、それぞれの歌の時代背景や地域の歴史文化などが反映されており、地域の民俗文化ともいえるのではないだろうか。

現在、新見市でわらべうたが収録された出版物として

は、「哲西の童唄」哲西教育委員会発行(1974)と「民話集三室峡」神郷町教育委員会発行(1996)の2冊がある。この「哲西の童唄」には276曲、「民話集三室峡」には35曲と非常に多くのわらべうたが収録されているが、ほとんどのわらべうたが歌詞のみで旋律が書かれていない。したがって、実際に歌ったり遊んだりすることができない。

そこで、これらを基に高齢者に実際に歌を歌ってもらい遊び方を再現してもらい、それを動画としてビデオに記録し、最終的にはDVDを作成して、本来の姿のわらべうたを保存し伝承していくことを目標としている。今回の報告は、その第1段階の結果である。

1. 調査方法

今回のわらべうたの調査においては、新見市社会福祉協議会が主催する新見市内の各地域にある「サロン」に集められた高齢者に、それぞれ覚えているわらべうた・遊び歌を歌っていただき、それを録画するという形で行った。

新見市内には、67か所サロンがある。そのサロンすべてにわらべ歌調査の依頼状を送付し、協力するという回答を得られたサロンは14か所であったが、さまざまな理由により実際に調査できたサロンは11か所であった。

調査対象：新見市内の高齢者116名

調査日時：2015年1月から3月

*連絡先：吉村淳子 新見公立短期大学幼児教育学科 718-8585 新見市西方1263-2

調査方法：高齢者の集まるサロンに出かけていき、歌や遊び、昔話などを録画する

2. 調査結果および考察

第1段階の調査結果として、21曲のわらべうたが収録できた。それらのわらべうたを以下の4種類に分類して示した。

①「まりつき・お手玉歌」

「一匁のいん助さん」「一で一畑お薬師さん」
「一かけ二かけ三かけて」「一れつらんぱんはれつして」
「西条山は霧深し」「たんのせたんのせ」
「一番はじめが一の宮」

②「縄跳び・集団あそび」

「たんすながもち」「ふるさとまとめて」「花いちもんめ」
「ゆうびんさん おはいいり」

③「子守唄・手合わせ唄」

「一番はじめが一の宮」「一かけ二かけ三かけて」「一に橋」
「空にさえずる 鳥の声～」「おちゃらかほい」
「ずいずいずっころばし」「まるやま あるけば～」
「ひとつ ひよこが まま食って さいのこてんでん」
「茶摘み」
「お月さんなんぼ」(子守唄)

④「その他の遊び唄」

「一番 楽しい お正月～」
「しばかり 縄ない～」(しりとり歌)

⑤遊び

お手玉で「おはさみ」「小さい橋」(特に歌はなく遊びのみ)
ゴム飛び遊び

⑥その他

「椿」「朝日は登りぬ」「すずめ」「からすの赤ちゃん」「田金祭り」「流れ星」「ほたる」という、子どもの時に習ったという歌も教えていただいた。これらは、どの本にも載っていない貴重な歌である。

「わらべうた」の意義

わらべうたとは、小島(1983)によると「わらべうたとは、子ども達が遊びや行事、また日常的な行動の中で無意識のうちに自然に歌い、その中で、子ども達が遊び仲間によって集団的に伝承してきた歌」としている。また、久万田(2007)は「子どもの遊びの中ではぐくまれた歌」、樋口(2002)は「子どもの遊び歌。子どもの日常生活である遊びの中で創造、伝承される音楽」と説明している。

したがって、わらべうたの定義は、言葉と動きを伴った遊びうたであり、口伝えて歌い継がれてきたものと理解できよう。

次に、わらべうたで遊ぶことの効果について、大倉(2000)は、次のように述べている。わらべうたで遊ぶ時は、子ども同士で手をつなぐ、脊に触れる、タッチするなど、体に触れるという行為が頻繁に行われる。このように自然に他者の身体の一部と触れあう行動は、安らぎを与え、他者への親近感を感じることができる。

また、わらべうた遊びの、回る、巡るなどの行動は、人間の基本的な動きであり、ある種の快感をもたらす。同じ動きを繰り返しながら輪になって回る動きは、心理的な高揚をもたらし、同じ位置に戻ることで、安堵感を持つなど、わらべうたには、遊びの中で、判断力、公正、正義、道徳性、ルールを守ることなどの社会性を育成するという働きもある。さらに、わらべうたで遊ぶことによって情緒や感情が発達し、それらは子どもの人格形成のうえでも重要であると考えられる。

さらに、荒井(2004)は、安定した歌のリズムに乗って遊ぶことで“拍感”が自然に身に付き、一体感を覚える。また、なかまたちと声をともに響き合わせる心地よさを、自然の中で楽しく体験するなどから、「子どもの協調性や集中力を養うだけでなく社会性を育てる」ことに繋がると述べている。

また、高城(2000)は、先祖の知恵と愛情の詰まったわらべうたは、自然で心地よく、親密な関係作りに最適だという。

高城(2000)が行った親へのアンケート結果では、「物がなくても歌と体で、生の人間同士のかかわりが持てる」「自然に相手に関心が向けられ、相手を感じ、心が合わせられる」「一緒に歌い、触れあうことで、人間関係が良好になる」「遊んでいる一人一人が大切な役割を持ち、誰ひとりいらない存在にならない」などがあげられており、人間関係を豊かにするわらべうたの教育力がうかがえる。

また、わらべうたを通して、親と子ども、そして高齢者という3世代での交流が可能になる。これは、実際に祖父母とかかわる事が少ない子どもにとっても、同じような高齢者の方と直接触れあい遊びを教えてもらうことは重要な経験となる。

このわらべうたを通じた世代間交流から生まれるものとして、荒井(2004)は、核家族化が進んだ現在の日本において、高齢者と遊んだ経験が少ない子ども達が、わらべうたを教えてもらうという活動を通して、“顔なじみ”のおじいさんやおばあさんができていき、遊びのリーダーとして尊敬の念が生まれ、からだを気遣うなどの優しさや思いやりがひきだされることがあるという。

さらに、それぞれの地域文化であるわらべうたを、子どもたちが代々歌い継ぎ、歌の命として地域に息づかせ

ることが、文化を受け継ぐことだとも述べている。

また、高齢者にとっても、わらべうたを教えるということに重要な意義がある。まず、高齢者の方が主役になれることである。どの場に伺っても、「いつもは、最高齢で静かにしている方が、今日は一番活躍した」という声が聞かれる。そして、わらべうたを教えてくれている時の表情は、最初とは打って変わって満面の笑顔でいきいきとした表情になり、声も大きくなり、さらに動作が機敏になるなどの評価を聞く。

そして、高齢者からは、「学生と一緒にやりたい」「学生に教えるのなら、大学に行くよ」という声も頂く。

このように、高齢者のわらべうたを歌う活動は、子ども時代の記憶をよみがえらせ、楽しく昔話をしたり、さらには身体記憶もよみがえり、脳の活性化に繋がっている、より前向きな発言も導き出すことができる。

3. まとめ

調査を行った結果、以下のことが明らかになった。

- ①調査を行った結果、高齢者の方が覚えているわらべうたは、比較的同じ曲が多かった。
- ②わらべうたを多く覚えている年齢層は、80代後半から90代前半あたりの方で、80代前半から70代の方は、あまり覚えていない。
- ③わらべうたの歌詞や遊び方に若干の違いがみられた。たとえば、「一匁のいん助さん」の歌詞では、「一匁

のいん助さん」が「一匁のいー助さん」であったり、「いの字が大好きで」が「いの字が嫌いで」のように、反対の言葉であったりする。また、同じ歌でも「お手玉」であったり「まりつき」であったりと遊び方にも違いがあった。わらべうたは口伝であるため、歌詞が変化していくことは当然のことであろう。

今後、採集できたわらべうたについては採譜し楽譜にしていくことを目標に、継続的に調査を行い、できるだけたくさんの方のわらべうたを収集していく予定である。

文献

- 荒井敦子：わらべうた採譜をとおして文化を受け継ぐ、子どものしあわせ (644), 草土文化, 8-10, 2004
- 久万田晋：「わらべうた」「日本音楽基本用語辞典」音楽之友社, 141, 2007
- 小島美子：「わらべうた」「音楽大辞典」5巻, 平凡社, 2853, 1969
- 高城敏子：わらべうたの教育力を探る (2) 日本保育学会大会研究論文集 (53), 34-35, 2000
- 樋口昭：「わらべうた」「新編 音楽中辞典」音楽之友社, 788, 2002
- 「哲西の童唄」哲西教育委員会発行, 1974
- 「民話集三室峡」岡山県神郷町の採訪記録2, 立石憲利著 神郷町教育委員会, 1996

